

関西農業史研究会々報

No.21-1981.6.6

第35回例会は、新入会員の高谷好一先生(京大東南了研)にお話しして頂きました。詳しくは、『農耕の技術』1号1978, か 滝野忠世論『東南了ア世界』1980, 創社 所の 高谷論文を御覧下さい。

第35回例会 高谷好一氏(4.25.93)

「水田の景観学的分類について」

アジアの稲作を、私は4つぐらいの類型に分けて考えている。扇状地、デルタ、平原、湿地の稲作である。それぞれの稲作に対して私の持っているイメージは次の如きものである。

【1】扇状地の稲作

扇状地には、村レベルで制御可能な程度の中小河川が多く流れている。河川はその規模が村レベルの技術で制御可能なものだから、農民達によって多く灌漑に利用され、手のこんだ灌漑移植が発達する。全体的にこじんまりとしており、箱庭的で、西洋人達がhorticultureとさえいう、あの土地生産性の高い稲作が見られるのはここである。

扇状地の河川は分流系をなす。すなわち、扇頂で1本であった川が扇央から扇裾にかけて無数に分岐してゆく。こういう状況のもとでは次の2つのことが直接的に帰結される。第一は、同一分

流系に属する全ての農民はお互に密接な関係を持つべきでない。何故ならば、全員が扇頂という一つの水源の水を分けあって使わなければならないからである。かくして、扇状地では水利慣行を軸とした強固な組織が生れてくる。それは、扇頂を掌握した者が水利に対して絶大な権利を持つ。下流へ行き、川が細るにしたがって水利に対する権利は、幾何級数的に縮小する。すなわち、一つの水系内では扇頂を頂点とする権利のピラミッドが生ずる。日本は扇状地の国である。日本の秩序と組織ある社会は、この種の水利条件と深く関係していると私は考えている。

【2】デルタの稲作

イラワジ・デルタ、メナム・デルタ、メコン・デルタ等がその例である。こうしたモンスーン・デルタの特徴は、その1単位が100万haを越す広大な低平地であることと、その全域が全面洪水と全面乾燥とを季節的にくりかえす両極的水文環境とを持つことである。こうした環境は、本来人間の居住を拒否するものである。

こうしたデルタは19世紀後半、大資本による運河網の建設があって後、はじめて急速に開発される。運河堤に列状に家が建てられ、その背後で人々は浮橋を作ることになる。浮橋栽培は、しかし、洪水まかせの極めて粗放なものである。デルタの巨大すぎる洪水のもとでは、誰一人としてその制御や灌漑への利用を考えもしない。結果は治水や灌漑工事等、共同作業の欠陥となり、ひいては地域社会の連帯感の欠陥を工え導いている。

開墾の歴史の浅さとあいま、デルタはその比較的高い生産性にもかかわらず、未だに開拓地の持つ無組織と流動性が至る所に感じられる。

【3】平原の稲作

インドイメージに描いている。平原とはゆるく起伏する水不足地帯である。この水不足のために稲は、あたかも雑穀の1つのようにして特殊な方法で作られることがある。例えばそれは直播き、ある程度伸びた後に、その上に馬糞がかけられ、除草と中耕が行なわれる。時にはこの中耕後、そこに雑穀の種子がまかれた可能性もある。いわゆる混播である。これら一連の技法は、この平原の稲作が、それより西に広がる乾燥地の農業に強く結びついていくことを暗示している。

平原は森林がなく見通しのきく空間である。ここは歴史を通じて、大文明が通過した帯である。と同時に大破壊がくりかえし襲って来た帯である。こうした文明と暴力に四六時中露出して、生命と財産を守らねばならないのが平原である。平原の農民達はこうして、他の稲作民に類を見ないくらい防衛的な集団を作って生きて来ている。

【4】湿地の稲作

赤道直下の湿潤地帯は、山腹の降雨林と低地の湿地林から成る。前者は焼畑の空間であり、後者は最近湿地稲作が広がっている空間である。

湿地林の地表は無数の倒木とピートで構成されている。最近ここに降下してきた人達は、ここで山刀と掘棒だけを用いた稲作を行なっている。通年湿性であるから、直播は不能であり移植を行なうが、犁を欠き、いわゆる無耕起稲作である。系統的には焼畑に直結した水稲である。

人々は圧倒的に優勢な森と、そこに住む精霊を恐れて生活している。かつて首狩り当時の影響でもあるうが、部族的な結合が強い。もっとも今日では、こうした古い契伝は消えつつある。山腹から湿地に降下した人達が、この新開地でどういふ稲作技術を確立し、どういふ社会を作っていくかは、今のところまだその方向も定まっていない。熱帯湿地は、この意味では未来の空間である。

【討論要旨】

- ①扇状地の稲作について。現実の農業について考える場合には、更に検討が必要である。あくまでモデルとしてみたものである。なお地質学的にみれば、西日本は花崗岩地帯で中小河川が多くて扇状地が得意やすい。東日本は火山岩地帯で大河川がまっすぐ伸びており、どちらかといえばデルタ型に近いのではと考えられる。
- ②混作について。インドでは混作理想が強く、日本では単作理想が強い。インドあたりでは、イネが雑穀^{アツ}となっていた。東進するほど単作の指向が強くなっていたのでは。
- ③アジア的専制君主について。扇状地が近いからしいないが、千の型にはない。飲み水さえ困るような乾燥地帯があてはまるのではないか。中国、日本などは違う。